「私の友人が陸軍士官学校受験当日に広島で原爆焼死」

鳥飼　國治　（９０歳）

終戦時、私は 15 歳の中学生でした。終戦直前、日本中の都市は、米軍の焼夷弾で焼き尽くされました。私の生まれは鳥取県の農村でしたので、戦災は免れましたが、戦争の被害は戦中も戦後も長く続きました。我が家では、長兄が戦死し、また大阪で被災した長姉が家族ぐるみで我が家に疎開してくるなど、色々な形で戦争の被害を受けました。

戦争中は、私は中学生でしたが、終戦まで軍需工場に動員されたり、農村工作隊として農村に動員されたりで、まともな授業は終戦直後からでした。戦争中は軍国主義一色でしたから、子どもはすべて軍国少年でした。中学校でも軍事訓練が頻繁に行われ、軍国教師が、特攻隊の養成の少年飛行学校への志願をすすめるなど様々な形で軍国主義教育が進められました。ですから憧れの上級学校は陸軍士官学校や海軍兵学校などでした。

私の友人は陸軍士官（経理）学校を広島で受験し、受験当日、原爆で焼死しました。広島長崎の原爆投下で日本は終戦を迎えましたが、終戦直後の一番の問題は、深刻な食糧難でした。戦時中配給制だった食料が、敗戦によって廃止されたため、都会の人々は、自分で食糧を求めざるを得なくなりました。食糧を求めて都会から農村へ通うようになりました。衣料と食糧の物々交換が主流でした。そういう形で終戦後長い期間に渡って戦争の爪痕を残しました。